

祖父秀吾は明治十三年新潟学校を卒業し、栃木、松本、埼玉、静岡等の師範学校の科学の教師をしていたがその中の何処の時かは聞かなかったが、祖母イネ十九才と結婚した。一女は赤子の時死亡、一人息子の秀雄が小学校の時、秀吾は病気で実家に帰って来た。イネは二舅姑に供え、小姑や奉公人も多く大変だったらしい。秀吾は遂に四十才で死亡。イネはその時三十三才。その後会津中学校を卒業した秀雄は大沼郡役所に務め松尾ルイを嫁にもらい孫も四人となり、やれやれと思ったのも束の間。ルイは三十六才で秀雄は四十二才で次々に死亡。自分も養蚕にせいをし働いた為リユーマチを患い随分苦しうだった。私が女子師範学校一年生の時、盲腸を病んだが「病氣すぐ来い」の寮の舎監からの電報で中の姉が仕度している中に今度は「病氣悪しすぐ来い」の追いがけの電報だった。祖母は野沢の大山神社に、吾が身にかえてと願をかけてくれたそう。まだ入学したばかりの六月、前日から腹が痛かったが我慢して授業を受け、帰って来て、寄宿舎でお洗い番（食事の当番）だった。何しろ入学して日も浅いので、他の人に代わってとも言えず、重い水桶を持ったりしたからか、意識ももうろうとし翌朝タンカで公立病院に運ばれ早速手術した時は、盲腸が破れ腹膜炎をおこす寸前で、腹膜炎をおこせば助からない時代だった。何とか命は助かったが、縫った傷も開いてしまつて、毎朝のガ―ゼ交換の辛かったのが忘れられない。こうして助かったのも、祖母の必死の願かけのおかげで感謝している。お礼参りに毎年大山神社に時には奥の院迄参りした。嫁いで上京するまで続いた。

女子師範学校では当時徹底した精神教育だった。私は私達の模範とされていた小野さつき訓導事件は、昭和初め頃かと思つていたし、宮城県の出身かとは思つていたが、出身地もわからず、何処に問い合わせ

せてよいかわからず、磐城高等女学校出身の同級生猪狩敏子さんに電話したら、「私の知人に小野訓導と同じ町出身の人がいるから聞いてあげる」との事、私は嬉しかった。その後早速電話をよこしてくれて「曖昧な点もあるので、蔵王町の教育委員会の電話番号も調べてや」ったから、電話かけてみな」と番号を知らせてくれた友達つて有難いなつてしみじみ思つた。早速蔵王の教育委員会に電話

をした。出られた方は丁寧親切に教えて下さった。小野さつき訓導は宮城県刈田郡福岡村で勤務先は蔵王宮小学校、生徒数五十六名。事件は大正十一年七月七日に、画を書きに白石川に引率して行き、注意しておいたのにもかかわらず、川に入った三名が溺れたのを袴のまま飛び込み、水泳は得意だったが、何しろ着物のままだし袴がまとわりついて、二人は救い上げたが、三人目を救い得ず、力つきて殉職された。今白石川畔に殉職の碑が建つているとの事である。まさか大正時代とは思わなかった。

昭和十一年三月十八日、私の女子師範学校の卒業式に出てくれた中の姉と一緒に高田駅に降りて、先ず驚いたのはその雪の多さだった。冬はバスも通らなかつた当時だけに、先ず駅の雪の階段を上がつて又びつくり、雪道は人家の屋根すれすれで、何の家も階段をつけて出入りしている。やつと家に着き、卒業証書と教員免許状を先ず神棚と仏前に上げ、祖母に「ただ今帰りました」と挨拶し、それからそれぞれの免状を祖母の前に並べ「おかげ様で卒業できました」と言つた時、祖母はきちんと座り直し、教師の覚悟を説き「若し生徒の上に自分の責任で何か申し訳ない事が起きた時は、何時でも命を投げ出せよ。それには私の懐剣を使つてもよいから」と自分の筆筒から、自分の嫁ぐ時に持ってきた懐剣を出して私の前に置いた。「家の娘として恥ずか